

思いやる心 苦境の今こそ

げる。

◆ ◆
夫と五男、五女と4人暮らした立石恵子さん
松本市岡田下岡田は「みんなストレスを抱えているからこそお互いに思いやりが芽生えた。外の緊張を持ち込まないようになっている」と話す。

なきや」と力を込めた。

◆ ◆

新型コロナウイルスの感染拡大はこれまでの生活様式を一変させた。遠方の親戚などと気軽に会えなくなったのも変化の一つ。制約の中でできることを楽しむ動きが広がり、通信端末を使った「リモート飲み会」や「リモート帰省」といった言葉が一般的となった。

超の過去最多になった。県内も同様の傾向で、県内でも「外出自粛」に伴う在宅時間の増加や、社会的ストレスの増加が家庭内トラブルにつながっているとい

られる」とする。県精神保健福祉センターは心の健康を保つポイントとして▽楽しくリラククスできる活動をする▽最悪の事態をずっと考え続けな

取り組むようになり、以前より会話が增えたという。首都圏に住む孫たちとは1年以上会えていないが、コロナ禍を機に文通を始めた。3月に届いた手紙に並ぶ「ことしこそあえたらうれいす」の文字に目を細め、一日も早い収束を願っている。

未来をひらく

「子供はすぐ大きくなる。早くみんなで集まりたい」
安曇野市豊科南穂高の細川定子さん(90)はそうつぶやいた。3姉妹の長女で、女手一つで娘3人を育て、7人の孫と15人のひ孫をかわいがる。春のお花見、夏の焼き肉、年の瀬の餅つき。畑仕事に裁縫、運動とパワフルな細川さんを慕

い、事あるごとに親戚が自宅に集まる。現在は三女の由美子さん(63)夫婦や孫夫婦らと4世代8人で暮らす。平成30(2018)年の米寿のお祝いには、親戚一同40人が駆け付けた。
そんな細川さんを中心とした盛大な集まりも新型コロナウイルスの感染拡大を受けて自粛中だ。昨年の卒寿は数人でひっそりと祝った。次女で隣に住む田村敦子さん(65)は「5月には(細川さんの)ひ孫が生まれた。コロナが収束したらまずはお祝い。誕生、進学、卒寿をまとめて盛大にやら

① 家族の絆を見つめ直そう

一方、配偶者や恋人に暴力を振るわれるといったドメスティックバイオレンス(DV)に関する相談は昨年度、内閣府によると速報値で前年度の1.6倍に急増し19万件



米寿のお祝いのときの集合写真を手にする細川さん(中央)。次女の敦子さん(左)、三女の由美子さんと共に新型コロナウイルス収束を願っている

(北條彩乃)

《第1部》ふるさと×アツプデート

みんなの一言

- ・人とのつながりが薄れている。
(松本市島内、公務員女性、45歳)
 - ・新型コロナウイルスで先行きが見えない。
(塩尻市広丘堅石、公務員男性、56歳)
 - ・新型コロナウイルスの感染状況次第。長引けば我慢も長引く。
(塩尻市宗賀、会社員男性、50歳)
- ※市民タイムスのHPなどのアンケートより

